

野見山暁治 略年譜

作成にあたり「野見山暁治年譜」(『野見山暁治展』石橋美術館、ブリヂストン美術館、2011年)、「関連略年譜」(井口幸久著『絵描きと画材屋』(忘羊社、2016年)所収)を参考にした。

1920年(大正9年)	福岡県穂波村(現・飯塚市)に父佐一・母キクエの長男として生まれる。
1927年(昭和2年)	飯塚尋常高等小学校に入学。この年、父佐一が嘉穂郡伊岐須(いぎす)の炭鉱を入手し炭鉱業を始める。
1933年(昭和8年)	福岡県嘉穂中学校(現・福岡県立嘉穂高校)に入学し、美術部に入部。
1938年(昭和13年)	2月 上京し、飯塚出身の画家斧山萬次郎の家に寄寓。同舟舎に通う。 4月 東京美術学校油彩科予科に入学。 8月 東京美術学校福岡県人展に出品。以降1942年まで参加。
1939年(昭和14年)	野見山家、穂波村から福岡市西職人町(現・中央区舞鶴)に転居。 3月 東京美術学校予科修了。 4月 同校本科に進学。南薰造教室に入る。 同年、池袋のアトリエ村に入居。 この頃フォーヴィスムの絵画に惹かれる。
1943年(昭和18年)	9月 東京美術学校卒業制作展に《妹の像》を出品。 9月23日 戦争のため、東京美術学校を繰り上げ卒業。満洲牡丹江省(現・黒竜江省)に派遣されるも、肋膜に水が溜まり、同年末入院。
1944年(昭和19年)	2月17日 内地に送還される。翌年9月まで療養生活を送る。
1945年(昭和20年)	9月 福岡市の実家に帰る。
1946年(昭和21年)	10月 第2回西部美術展に出品、《塔》で福岡県知事賞受賞。 12月 第1回青蛾会洋画展に《静物》を出品し、朝日新聞社賞を受賞。 この年、四国から福岡にやってきた今西中通(いまにしちゅうつう)と知り合う。今西との交流の中で、セザンヌの影響を受け、さらにキュビズム風からグレコ風へ作風が変わる。
1947年(昭和22年)	5月 第3回西部美術展に《卓上髑髏》を無鑑査出品し、西部美術協会員に推举される。
1948年(昭和23年)	実家を出て上京。 福岡市在住の内藤陽子と結婚。
1950年(昭和25年)	日本橋の北莊画廊で初の個展を開催。
1951年(昭和26年)	この頃、筑豊の炭鉱風景を描く。
1952年(昭和27年)	11月 土田のタケミヤ画廊で二度目の個展。 12月 フランス政府私費留学生として絵画研究のため渡仏。
1953年(昭和28年)	1月 アカデミー・ド・ラ・グラント・ショミエールに入学、3年間で在籍する。 パリ在住の椎名其二(しいなそのじ)氏、金山康喜(かなやまやすき)氏、小川国夫氏と知り合う。
1955年(昭和30年)	10月 陽子夫人到着。共にパリで暮らす。
1956年(昭和31年)	10月8日 陽子夫人、パリで病没(享年29歳)。
1957年(昭和32年)	7月 パリ郊外に転居。
1958年(昭和33年)	9月 「滞欧作品による野見山暁治個展」(ブリヂストン美術館講堂)に27点を出品。 11月 《岩上の火》で第二回安井賞を受賞。
1961年(昭和36年)	『愛と死はパリの果てに』(講談社)を出版。 《人間》(福岡市美術館所蔵)を制作。
1964年(昭和39年)	6月 帰国。
1965年(昭和40年)	10月 「野見山暁治個展」(福岡・玉屋百貨店)。滞欧作品約70点を出品。
1968年(昭和43年)	10月 東京藝術大学助教授に就任。
1971年(昭和46年)	8月 福岡市在住の武富京子と結婚。 11月 磯崎新設計による福岡相互銀行(現・西日本シティ銀行)本店の応接室の室内装飾を完成。
1972年(昭和47年)	4月 東京藝術大学教授に就任。
1974年(昭和49年)	9月 第1回東京国際具象絵画ビエンナーレ展(渋谷・東急)に《タヒチ》《モレア》(福岡市美術館所蔵)を出品。
1976年(昭和51年)	福岡県糸島郡志摩町に新居を建築。 『四百字のデッサン』を河出書房より出版。同年第26回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。
1978年(昭和53年)	11月 「アジア美術展第2部 アジア現代美術展」(福岡市美術館)に《山のうえ》を出品。
1980年(昭和55年)	東京藝術大学教授を退官。以降、1988年まで客員教授を務める。
1981年(昭和56年)	9月 福岡相互銀行(現・西日本シティ銀行)エントランスホールのモザイク天井画が完成(協力:東京藝術大学教授・麻生秀穂)。
1983年(昭和58年)	10月 初の回顧展「野見山暁治展」(北九州市立美術館)。 11月 退官を記念して「野見山暁治デッサン展」(東京藝術大学藝術資料館)を開催。
1988年(昭和63年)	3月 東京藝術大学客員教授を退く。
1991年(平成3年)	2月 「第1回福岡・佐賀・長崎三県合同企画展 西洋画への挑戦—洋風画から洋画へ、そして」(長崎県立美術博物館、福岡県立美術館、佐賀県立美術館)に《朝》を出品。
1992年(平成4年)	5月 「旅と雲 野見山暁治リトグラフィ展」(麻布・ギャラリーMMG)
1993年(平成5年)	6月 「スペースコンセプション福岡」(福岡市美術館)に《伝承のかたち》《明日へ》を出品。
1994年(平成6年)	2月 「旅と雲 野見山暁治リトグラフィ展」(福岡・ギャラリーおいし)
1996年(平成8年)	3月 芸術選奨文部大臣賞を受賞。
1997年(平成9年)	8月 「野見山暁治版画展」(盛岡・第一画廊)に《旅と雲》を展観。
2000年(平成12年)	1月 「イメージの原風景 日本の水彩」展(福岡県立美術館)
2001年(平成13年)	6月 「野見山暁治の版画『旅と雲』」(福岡市美術館)
2005年(平成17年)	第一回福岡県文化賞受賞。
2011年(平成23年)	毎日芸術賞受賞。
2014年(平成26年)	5月 長野県上田市に戦没画学生慰靈美術館「無言館」開館。
2016年(平成28年)	文化功労者として顕彰される。
2023年(令和5年)	妻武富京子没(享年75歳)。
	戦没画学生慰靈美術館「無言館」の活動に対して菊池寛賞を受賞。
	JR博多駅にステンドグラス壁画《海に向こうから》完成。
	文化勲章受章。
	3月 飯塚市名誉市民(第一号)として顕彰される。
	6月 心不全のため102歳で死去。

野見山暁治のしごと

The Legacy of Nomyama Gyoji

会期 2024年6月13日(木)~9月1日(日)

会場 近現代美術室B



人間 (1961) 145.6×97.2 油彩・画布

福岡と東京を拠点に活動した美術家・野見山暁治は、2023年6月に102歳で亡くなりました。

1920年に福岡県穂波村(現・飯塚市)に生まれた野見山は、東京美術学校に入学するも戦争のため繰り上げ卒業、兵役につき、1950年以降本格的な画業を開始しました。幼少期から手を動かして描くことが好きだった野見山は、当初萬鉄五郎らに影響され粗い筆致の具象画を描いていましたが、戦争や留学、家族の死を経て、その表現内容は変化していました。

野見山は優れた文筆家でもあります。『四百字のデッサン』をはじめ、多数の著作があります。リズミカルで、気の向くままにエピソードを連ねていく書きぶりには、彼の絵画に通ずる軽やかな魅力があります。文章、線や色彩は、いずれも世界を捉えるための道具だったのでしょうか。

没後1年が経った今、当館が所蔵する、また寄託を受けたリトグラフおよび油彩作品、図書資料を展示し、そのしごとを振り返ります。

[学芸員 忠 あゆみ]



〒810-0051
福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051(代表)
FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

絵のしごと

※記載は、題名(日英)、制作年、技法・材質(日英)、画面寸法(縦×横cm)、寄託情報、当館分類番号です。

31 人間

Figure
1961
油彩・画布
oil on canvas
145.6×97.2
1-A-486

32 モレア

Moorea
1974
油彩・画布
oil on canvas
130.0×195.0
1-A-178

33 穹

Sky
1983
油彩・画布
oil on canvas
195.9×245.1
2020年 西日本シティ銀行所蔵(寄託)

34 説話

Narrative
1993
油彩・画布
oil on canvas
182.0×227.5
2020年 西日本シティ銀行所蔵(寄託)

1-30 旅と雲

Trips and Clouds
1991
リトグラフ・紙
lithograph on paper
各22×49.6
1-E-627～645

- (1) 4月26日 ローランドヒル 風がつよい
雲のたれこめたマンハッタン
- (2) 4月27日 Kiefer パリのサロンで見た
- (3) 4月27日 蟻の生活、人間より立派な白い鳥・イルカ?
- (4) 4月28日 グッゲンハイムの煙
phantom
- (5) 4月30日 いつまでも続く人の列、ハイキングだろうか、
何、F君はじめてカードをつかって御馳走
- (6) 5月1日 出るとなると住みたくなる
Laura Dean
- (7) 5月2日 すっかり陽気、ピラミッド
走りながら見た Grand Amie
- (8) 5月4日 Les saison du printemps de Pekin
出発 ぼくらは何もしない
- (9) 5月5日 パリを早朝に発つ
ウキーン、U夫妻と会う
- (10) 5月5日 オペラを途中で出る、少し疲れた
植込みの中の夕食
- (11) 5月6日 ミュゼー 夕暮の丘の上の食事
地下鉄の電車が目の下から出てくる
- (12) 5月6日 天井のたかいキャフェ
建物にかこまれた道
- (13) 5月7日 デュルクたちウイーンに着く
みんなで食事をつくって食べる
- (14) 5月9日 昼、ウキーンを発つ、うまい運転
清々しい田舎のホテル
- (15) 5月11日 ボンの近く Molitor邸に着く
ケイカイがきびしい、製本の部屋の匂い

(16) 5月12日 久振りに昔のはなし、昔、
ライン河がどこまでもうねっている

(17) 5月13日 ローレライ 雨にけむる河っぷち
のキャフェ

(18) 5月13日 昼近くデュルクの両親の家に着く
彼の祖母、ケーキをつくる

(19) 5月14日 ブレーメン 古い屋並 古い通り
4階建てのデュルクたちの家

(20) 5月14日 デュルク 車の修理にもってゆく
裏窓 公園 透明なアスパラガス

(21) 5月15日 ずっとここに住んでいるみたいになる。
清々しいドイツ人の生活

(22) 5月16日 公園の向うの小さなギャラリィ
遠くに船、夕陽を、入り江を、みんなと食事

(23) 5月17日 東ドイツに向う列車の人々
電車の中のおむすび、ハンブルクに着く

(24) 5月18日 湖のほとり、日航の夫妻、
飾り窓の女にインクをぶつけられる

(25) 5月19日 やっと間に合う、ハンブルク発
かなりの陽気

(26) 5月19日 車の運ちゃんの能弁 セーヌの向うの
オルセー美術館 又、バスを間違える"

(27) 5月20日 新しいパリ、サン・クルーの午後 O君と
その息子たち、セーヌ 以前、よくここで描いた

(28) 5月21日 朝のキャフェのマダム、Y君と歩く、
東京ではイラスト展の初日"

(29) 5月23日 昨日はO君のアトリエでよく騒いだ以前の
友人たちとは会えなかった 病気になっている

(30) 5月24日 オтель・ド・ビルのマガザン 筆を買う、
ここだったんだ 夜遅くまで荷造り

文筆のしごと

※展示室で読める野見山暁治の本です。

- 野見山暁治ほか『祈りの画集 一戦没画学生の記録一』
日本放送出版協会、1977年
- 野見山暁治『四百字のデッサン』(6版) 河出書房新社、
1979年
- 野見山暁治『絵そらごとノート』筑摩書房、1984年
- 野見山暁治『一本の線』朝日新聞社、1990年
- 野見山暁治『署名のない風景』平凡社、1997年
- 野見山暁治文・絵『しま』光村教育図書、1999年
- 野見山暁治『うつろうかたち』平凡社、2003年
- 野見山暁治『いつも今日一野見山暁治 私の履歴書一』
日本経済新聞社、2005年
- 野見山暁治『野見山暁治画文集 目に見えるもの』求龍堂、
2011年
- 野見山暁治『どうにもアトリエ日記』生活の友社、2020年
- 野見山暁治『最期のアトリエ日記』生活の友社、2023年